

陳 述 書

2019 年 6 月 20 日

原告 岩下すみ子
住所：長崎県東彼杵郡川棚町

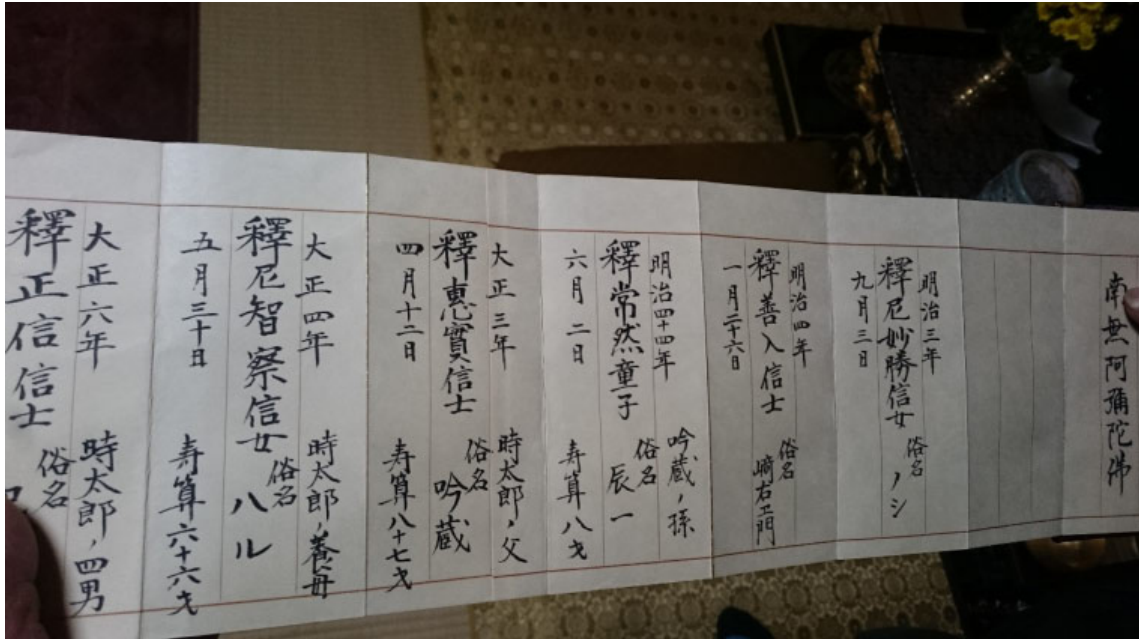
1 はじめに

私は、この陳述書で私がこうばるにきた経緯、こうばるの地でどんな生活を送ってきたのか、また、無意味、無駄な石木ダム建設工事が進められることによって、私たちのこれまでのこうばるの歴史や生活が、そして、私たちのこれからの生活が根こそぎ奪われてしまうことをお伝えしたいと思います。

2 私がこうばるにきた経緯

私は、長崎県佐世保市の出身です。24歳のとき夫の岩下和雄と結婚し、こうばるの地に移り住みました。それから40年以上が経ち、私の人生のほとんどはこうばるとともにあります。岩下家は江戸時代から続く家で、夫は五代目になります。明治、大正、昭和、平成だけを考えても岩下家は150年以上、このこうばるに根差した家です。お盆、お正月、御彼岸には姉妹が帰郷し、仏壇に手を合わせ、先祖を大切に思い祀っています。この土地で育ってきたことを懐かしく語り合います。何世代にもわたって次の世代、次の世代へと岩下家が受け継がれ、守られてきたことを実感します。

私には3人の子がいます。6代目の岩下家の子をこうばるの地で育ててきました。三男は現在も同居し、こうばるから程近いところでバーを経営しています。



3 こうばるの環境

私が住むこうばるは、川棚駅から10分くらいのところにあります。長崎市や佐世保に行くにも交通の便の良いところです。家の周りには畑があり、自分で野菜を作って食べています。田んぼもありおいしいお米が食べ放題です。田んぼにはいもりやオタマジヤクシが泳ぎ、山の水たまりにはサンショウウオがいます。実際にサンショウウオを見たことがありますか。水がきれいで空気がおいしく、梅、くり、かき、びわなどの果物、山菜など豊富な自然の恵みに囲まれています。採ってきた山菜を、私の手作りのピザ生地に乗せ、夫の手作りのピザ窯で焼き、庭でパーティーを開いて食べます。

流れる川の水は澄んでいて、こうばるの子どもたちは、夏になると川遊びを楽しみます。川の水がキラキラしていて、そこに子どもたちの笑い声が響きます。なんのことはない風景ですが、子どもたちが元気に、朗らかにしている様子は、幸せを感じる瞬間です。

後でも述べますが、5月下旬になると、こうばるの川には無数のホタルが乱舞します。山肌に飛び交う無数のホタルの光は、穏やかで長閑なこうばるの地を幻想的な姿に変えてくれます。

すべてのものがこの地域にはそろっていると思います。今時めずらしい場所です。

4 こうばるでの暮らした 40 数年間

私が 40 数年前、こうばるに来た当初、この地に慣れるのに大変なこともありました。こうばるでは3人の男の子を育て、家事をしながら、化粧品の販売業を行っていました。家事と子育て、仕事に追われる毎日はとても忙しく過ぎて行きました。それでも子ども達はすくすくと育ってくれました。こうばるの自然と地域の協力もあったからです。

今住んでいる家は平成4年に新築しました。家を建てたときの材木は、岩下家の山からすべて伐採してきたものです。それも、苗木から植え、何十年も育てたひのき、まきの木を使っています。床柱、大黒柱は立派なものです。柱の一本一本に思いを込めたこの家は、丈夫で台風、強風

が吹いてもびくともしません。



私は、四季折々に花や木を植え、庭造りを楽しんでいます。家の前の山にはブルーベリーの木があり、毎年、実を収穫してジャムを作っています。毎朝の食事でヨーグルトに入れたりパンにつけたりして食べています。みんなにもお裾分けをし、「美味しい」といって喜んでくれます。何よりもうれしい瞬間です。



私は、料理が得意です。この石木ダムのことになければ、私は反対運動に携わることもなく、ゆとりのある人生だったと思います。私には、こうばるの地で「カレーハウスハイジ」という名前の店をもつことを夢

見ていました。しかし、それは叶う事はありませんでした。



子どもたちが小さいころ、庭に小屋を造ってもらい、合鴨、うさぎ、にわとりなどを育てていました。何匹も育てていた合鴨が並んで小屋から道を渡り川へ遊びに行き、夕方になると並んで歩いて戻って来ていました。とってもかわいらしかったです。ほほえましい風景です。今は家に5匹の猫が住んでいます。外にも7匹くらいいます。猫は昔からいました。家族全員が猫が好きなので必ずいました。

川原の男性たちは炭釜を造り、炭も自分たちで作っています。

我が家の庭には夫が作ってくれたピザ釜があります。近所の人達、何家族も集い、できたてのピザを楽しんでいます。ピザだけではなく、採れたてのお米で握ったおにぎり、山菜、川に泳ぐうなぎなども振舞われます。皆で競うようにそれぞれに収穫したものを持ち寄って、みんなで美味しいものを分け合います。美味しいものをいただいているのはもちろんですが、このこうばるの地に生きるみんなと幸せな時間を持ち寄り共有している感じです。



5 ホタル祭りについて

毎年5月の終わりにホタル祭りを開きます。こうばるのみんなが何カ月も前から準備します。今年は32回目でした。こうばるの地を大切に思ってくれる支援者の方も増え、その方々のお手伝いもいただいています。準備は何カ月も前から行い、当日は、いろんな食材を調理して、遠くからホタル観賞に来られた方に振舞います。地元でとれた猪肉を使った料理、よもぎが沢山入ったふつ餅、ジャガイモで作るホタル団子など準備は大変です。よもぎは4月に新芽を摘み、それを冷凍保存しておきます。

メインの広場には竹で組み立てた櫓を造り雰囲気作りもばっちりです。会場には、みんなのがやがやした熱気がひろがり、お客さんと地元の私たちとの会話や笑い声がひろがり、とても暖かい空気に包まれます。そして日が落ちて辺りが暗くなると、蛍の光がともり始めます。ホタルたちが競うように光を灯し、乱舞する様に、私たちも来場したお客さんたちも、うっとりとしとれます。毎年見ている風景ですが、何度みても心に響きます。

年々、こうばるホタル祭りは来場者が増え、当日の交通整理も大変なほどです。準備した食材も早く売り切れてしまいます。

祭りが終わるとみんなで「今年も頑張ったね～」とお互いを褒め合い、ホッとした気持ちを味わいます。そして、「また来年もがんばろう！！」とみんなで声かけあいます。これからもこうばると私たちの生活がこの地で続いて行くことを当然のことと思っています。

6 私がこうばるから離れない理由

なぜ石木ダムを造らなくてはならないのか、その疑問をずっと抱えています。私が岩下家へ嫁いだときから、この石木ダムの問題はありました。この石木ダムの問題は 60 年近くも続いています。

長崎県や佐世保市の説明は洪水や濁水に備えるということを繰り返すばかりで、その先の納得いく説明をしてくれません。何度も対話を求めましたが、長崎県も佐世保市も真正面から話し合おうとしません。話といえば土地の値段のことばかりです。私たちが「どうしてダムが必要なのか」「納得のいく根拠を示して欲しい」と説明を求めることがいけないことなののでしょうか。私たちは、ダムができれば土地や家、こうばるの歴史、営みのすべてをダムの底に沈められてしまうのです。

私はこうばるに住んで 40 数年ですが、それでもこうばるを愛する気持ちは誰にも負けません。この土地からここに住む人たちから、計れないほどのものを受け取りました。何世代も数百年もこの地を受け継いできた人は猶更だと思います。長崎県や佐世保市が根拠を示さないのは権力の横暴だと思います。

私たち住民は、長崎県がいつ工事を始めるのか毎日毎日不安で、家を空けることができません。落ち着いて旅行に行くこともできないのです。このダム問題がなければ、私たちはもっと普通に人生を楽しんでいました。私たち住民は、だれもがする旅行さえもできないでいます。毎日毎日、なぜ私たちの生活が人生や歴史がダムの底に沈められてしまうのか何度考えてみても自分を納得させる答えは出てきません。それは、長崎

県や佐世保市が何となくしか説明しないからです。どうして必要なのか、なぜ私たちが多数の市民の犠牲にならなければならないのか、納得のいく説明が60年近く放ったらかしです。

前にも述べましたが、私が、ダムのこと、強硬に進められる工事の事がなければ、私には夢がありました。こうぼるの地でカレーハウスを開きたかったのです。名前も「カレーハウス ハイジ」と決めていました。カレーには地元の食材を使い、店にはこうぼるのみんなが集まり、ゆっくりおしゃべりをして過ごせるお店を作りたいかったのです。しかし、ダム問題で私の人生は影響を受けています。

7 こうぼるや私たちの人生はここにしかないこと

子供たちも強制測量の時に学校を休ませ家族とともに権力と闘ってきました。子どもたちには嫌な思いをさせたかもしれませんが、みんな素直に、自由に、伸び伸びと育ってくれ、社会人になっています。

長男は、こうぼるの家に住み、それはこの自然豊かな地域に住み、こうぼるの皆が、こうぼるの子ども達をみんなで見守ってくれたからこそです。今の世の中、こういう場所が残っていてもいいじゃありませんか、こうぼるは、ただの山村じゃありません。どこにでもある田舎の村だと思ふのは傲慢です。日本中に山村は沢山あるとお思いでしょうか。似た風景はあるかもしれませんが、そこに住む私や私たちは、私たちがこうぼるで育む気持ちや人間関係や歴史は、ここにしかありません。こうぼるという地はたった一つしかありません。必要のないダムに、多数者の権力の横暴によって沈められてよい場所では決してありません。

8 さいごに

全国にも石木ダム反対の声が届きびっくりするくらい多くの方々がかこうぼるに来てくださるようになりました。『ほたるの川のまもりびと』という映画もでき、映画を見たという人たちがこうぼるに来てくれてい

ます。多くの方が、石木ダムの建設に疑問をもっています。

強制測量の時に闘って来た子供たちが40代～50代になり、30代だった私たちも70代～80代になりました。いっしょに生活を共にしてきたおばあちゃん達もなくなり、私たちがおばあさんになりました。それ程長い年月が経っているのに、石木ダムの計画はまだまだ続いています。人生のすべてをダム問題に奪われ安らぎのある時を過すことが出来ません。どうか私たちの築き上げた暮らしを奪わないで下さい。

石木ダムが真に必要なのか、澄んだ目で私たちが奪われるものが何かを見て下さい。奪われるものは、土地や建物だけではありません。こうばるの自然、ホタル、サンショウウオ、田んぼ、畑、澄んだ川、そこで遊ぶ子どもたちの時間、経験、笑顔、こうばるで採れる山菜、果物、採れた食材で作るピザ、美味しいものを持ち寄って食べる仲間との時間、そこで育まれる会話、笑い声、ホタル祭り、ホタル祭りを作り上げる時間、こうばるの住民が手を携えて作り上げる祭りそのもの、ホタルの乱舞、幻想的な風景と時間、支援してくれる人のあたたかさ、こうばるを次の世代にも残していきたいという強い願い、ホタルの乱舞を地元の食材を待ち遠しく思っている来場者、私たちが住んでいる家、四季折々の花を育てた庭、その家で一緒に生活したおじいちゃん、おばあちゃん、家族の思い出、時間、挙げればきりが無いほどの無数の事柄を、私たちの人生を、本当にダムの底に沈めていいのか、澄んだ目で見て下さい。裁判官は、私たちこうばるに住む一人一人の人生を顔を思い描き、私たちの一人一人の目を真正面から見て、このこうばるの地をダムに沈めてもいいんだと言えるかどうか、何度も何度も何度も裁判官の良心に問いかけて下さい。

権力で、多数の力で、今ここに暮らす私たちを、私たちの生活を奪い取ることはできません。私達はここに住み続けます。この地を訳のわか

らない理由で、誰かの財布を潤すダム工事のために、私の人生を奪われることには断じて納得がいきません。私はあきらめません。

ダムに沈めないでください。お願い致します。

以上